

# 三部三昧耶と三部諸尊

川崎 一 洗 (一 洋)

## 一 緒言

浄三業、仏部三昧耶、蓮華部三昧耶、金剛部三昧耶、被甲護身の五種の印明によって構成される、いわゆる「護身法」は、われわれにとつて最も馴染みの深い作法である。真言行者は、一座の行法をはじめ、定時の勤行、葬儀、廻向や祈願の法要など、その初めには、必ずこの護身法を修して自身を莊嚴する。そしてその終わりには、浄三業を除く四種の印明を再び結誦し、座を立てて日常の菩薩行へと戻る。<sup>①</sup>

五種の印明のうち、浄三業は、一切法の清浄性に基づいて心身の浄化を図る印明であり、被甲護身には、行者が障礙者から心身を護り、自利利他に精励するために甲冑を装着することが意図されている。そして、「三部三昧耶」と総称される仏部三昧耶、蓮華部三昧耶、金剛部三昧耶の一具の印明は、仏部、蓮華部、金剛部の諸尊が行者の身・語・意の三業を加持することによって、それらを仏の身・語・意の行為を意味する三密へと転化させ

る三密瑜伽行であり、それによって即身成仏を果たすことも可能となる重要なプロセスである。よって、中院流や子鳥流のように、護身法を授かるために護身法加行の実修を課する流派も存在する。

ちなみに、元杲僧都の『広次第』（金剛界）に記される三部三昧耶の観法の文を示せば、次のようである。<sup>2)</sup>

〈仏部三昧耶〉

印を結び已って、仏部の諸尊、相好分明なりと想え。即ち真言を誦じ、印を頂上に安じて便ち散ず。此の印を結び、及び真言を誦じて、仏部の一切如来を驚覚したてまつるに由って、聖衆皆来りて行者を加持護念したもう。身業清浄なることを獲得せしめて、罪障消滅し、福恵増長す。

〈蓮華部三昧耶〉

印を結び已って、観自在菩薩、相好端嚴にして、無量俱胝の蓮華部の眷属圍繞せりと想え。即ち真言を誦じ、印を頂の右に安じて便ち散ず。此の印を結び、及び真言を誦じて、観自在菩薩及び蓮華部の聖衆を驚覚したてまつるに由って、皆来りて行者を加持して、語業清浄なることを獲得せしめて、言音威肅にして人をして聞かんと樂わしめ、弁才無礙にして説法自在なり。

〈金剛部三昧耶〉

印を結び已って、金剛藏菩薩、相好威光あつて、無量の執金剛眷属圍繞せりと想え。即ち真言を誦じ、印を頂の左に安じて便ち散ず。此の印を結び、及び真言を誦じて、金剛藏菩薩並びに金剛部の聖衆を驚覚したてまつるに由って、皆来りて行者を加持して、意業清浄なることを獲得せしめて、菩提心を証し、三昧現前して、速やかに解脱を得。

では、ここに言及される仏部、蓮華部、金剛部の聖衆諸尊とは、具体的にどのような尊格群を指すのか。本稿

では、護身法を實踐する際により明確な観想に資するべく、初期密教経典や、三部の構造を有する胎藏曼荼羅にそれらを尋ねてみたい。

## 二 初期密教経典に説かれる三部諸尊

密教における仏部、蓮華部、金剛部の三部の概念は、釈迦を中心に、その左右に観音（蓮華手）と金剛手の両菩薩を配する三尊形式に端を発すると考えられている（図A）。やがて、両菩薩の持物にちなんで、観音とその眷属たちは蓮華部、金剛手とその眷属たちは金剛部と称されるようになった<sup>③</sup>。

なお仏部の主尊については、特定の尊格が規定されるわけではなく、釈迦や毘盧遮那など、三尊像や曼荼羅における中尊を指す場合が多い<sup>④</sup>。チベット仏教では、文殊が仏部を代表する尊格とされ、文殊、観音、金剛手の三尊が「三部主尊（リクスムゲンポ）」として一般的に信仰されている。胎藏曼荼羅でも、釈迦院のすぐ上部（東方）に文殊院が置かれており、文殊が仏部の尊格として認識されていたことがわかる<sup>⑤</sup>。

初期密教経典に分類される『蘇悉地経』（漢訳の「真言相品」）には、三部の諸尊が体系的に示されているので、それらを一覽表にまとめてみよう<sup>⑥</sup>。



図A マトウラーの釈迦・観音・金剛手の三尊像  
（ニューデリー国立博物館）

部族	部母	明王	忿怒
仏部	仏眼	最勝仏頂	阿鉢囉氏多
蓮華部	半拏囉縛悉寧	訶野鉦利嚩	施嚩嚩訶
金剛部	忙莽雞	蘇嚩	軍荼利

仏部の部母である仏眼 (Ucana) は、開眼作法の本尊として知られる仏眼仏母に相当し、胎藏曼荼羅では、釈迦院に配されている。最勝仏頂は、その真言 *namah samantabuddhanam om bhruṃ* から金輪仏頂と同尊と思われ、胎藏曼荼羅では釈迦院に含まれる。阿鉢囉氏多 (Aparāṭita) は無能勝明王のことで、胎藏曼荼羅の諸作例では、釈迦院における釈迦牟尼の座の下にその妃とともに描かれる。蓮華部に属する、半拏囉縛悉寧 (Paṅḍaravāsini) は白処 (大明白身、白衣)、訶野鉦利嚩 (Hayagrīva) は馬頭、施嚩嚩訶 (Śivayā) は寂留明のサンスクリット尊名で、現図胎藏曼荼羅では、いずれも蓮華部院 (観音院) に配されている。そのうち寂留明は、現図曼荼羅では柔和な菩薩形の姿に描かれているが、善無畏三蔵系の胎藏図像では、本来の忿怒尊の姿に描かれている (図B)。



図B 現図曼荼羅 (左) と胎藏図像 (右) の寂留明

金剛部の部母である忙莽羅 (Mamaki) は、現図胎藏曼荼羅の金剛部院 (金剛手院) には欠落しているが、胎藏図像および、金剛智三藏・不空三藏系の胎藏旧図様では、右手に金剛杵を持つ姿で描かれている。金剛部の明王である蘇嚩 (Sumbha) は降三世明王の別名で、現図曼荼羅では勝三世と呼ばれ、持明院 (明王院) に描かれる。また、軍荼利とは、五大明王にも含まれ軍荼利明王のことで、現図曼荼羅には現れないが、胎藏図像では執金剛藏 (金剛手) の眷属の一尊として、胎藏旧図様では単独尊として六尊の眷属を従えて描かれている。

翻って、曼荼羅作壇の通則を説くことで知られる初期密教経典『蕤呬耶経』の「摩訶曼荼羅品」に説かれる曼荼羅では、胎藏曼荼羅と同じように、本尊の東方 (画面の上部) に仏 (釈迦) を中心とする仏部の諸尊、北方 (画面の向かって左) に観自在 (観音) を中心とする蓮華部の諸尊、南方 (画面の向かって右) に執金剛 (金剛手) を中心とする金剛部の諸尊が配置される。それら三部諸尊の内訳は以下のようなようである。

仏部……仏、如来毫相、如来舍悪底、輪王仏頂、超勝仏頂、如来眼、如意宝幢印、諸使者、無能勝

蓮華部……観自在、耶輸末底、大白、槃坦羅幡糸泥、馬頭、一髻、多羅、微喫、大吉祥、円満

金剛部……執金剛、金剛鉤、金剛拳、遜婆明王、軍荼利忿怒、槃坦尼訖涅婆、金剛鑿鉢、金剛棒、不浄忿怒

なお、『蘇悉地経』の「補闕少法品」には、これらの三部諸尊を十四尊ずつ (門衛を含む) に増広した仏部、蓮華部、金剛部の別壇の曼荼羅が説かれるが、それら三グループの尊格群はそれぞれ、現図胎藏曼荼羅の釈迦院、蓮華部院、金剛部院にほぼ全尊が含まれており、初期密教経典に説かれる三部諸尊は、胎藏曼荼羅に継承され、発展したことがわかる。

しかし、これら初期密教經典に説かれる曼荼羅は、その作例が遺されておらず、また、經典本文に一々の尊格の詳しい尊容が説明されていないため、具体的にそれらをイメージすることは困難である。よって次に、作例が現存する胎藏曼荼羅における三部の諸尊を眺望してみよう。

### 三 胎藏曼荼羅に描かれる三部諸尊

胎藏曼荼羅の図像には、いくつかの系統が存在する。現在われわれが用いる弘法大師請来の現図胎藏曼荼羅（以下、現図と略称）は、恵果和尚によって考案されたとされる胎藏曼荼羅で、最も新しい系統である。より古い胎藏曼荼羅に、智証大師・円珍が請来した胎藏図像と胎藏旧図様がある。胎藏図像は、善無畏三藏所伝の図像とされ、インド的な要素を多分に含んでいる。<sup>10</sup> 一方、胎藏旧図様（以下、旧図様と略称）は、『金剛頂経』系の密教を中国に移植した金剛智三藏、不空三藏が伝えた曼荼羅で、金剛界系の尊格が各所に導入されている。さらに、チベットにも胎藏曼荼羅の作例が遺されており、日本に請来された胎藏曼荼羅に比して、『大日経』の本文に忠実に描かれていることが明らかにされている。

以下では、諸系統の胎藏曼荼羅を対照しながら、仏部の諸尊が描かれる釈迦院、蓮華部の諸尊が描かれる蓮華部院、金剛部の諸尊が描かれる金剛部院を中心に、三部諸尊の詳しい尊容を紹介したい。<sup>11</sup>

なお、胎藏曼荼羅の伝統では、時代が下るにしたがって他の経軌から新たな尊格が取り込まれ、尊数が増加する傾向がある。現図では、釈迦院が三十九尊、蓮華部院が二十一尊（眷属を含めると三十四尊）、金剛部院が二十一尊（眷属を含めると三十二尊）で構成されるが、『大日経』「具縁品」の本文では、釈迦院に十一尊（他に五浄居天）、蓮華部院に七尊、金剛部に五尊（他に金剛部眷属）が説かれるに過ぎない。本稿では、『大日経』所説

の、根本の尊格のみを取り上げることとする。私見ではあるが、三部三昧耶の印明を結誦する際には、これらの諸尊を観想すればよいように思われる。胎藏圖像より、根本の尊格の圖像を抜粋して示したので、参照されたい。<sup>13)</sup>

〈根本の尊格〉

釈迦院……釈迦牟尼、能寂母（仏眼）、毫相明、白傘仏頂、勝仏頂、最勝仏頂、火光聚仏頂、捨除仏頂、廣大  
仏頂、極大仏頂、無辺音声仏頂

蓮華部院……觀世自在、多羅、毘俱胝、得大勢、持明称者、白処、何耶揭利婆（馬頭）

金剛部院……持金剛、忙奔雞、金剛針、金剛商羯羅、月麁、金剛部眷属

（一）仏部の諸尊

釈迦牟尼

仏部の諸尊が集会した釈迦院の主尊は、釈迦牟尼である。漢訳『大日経』の「具縁品」には、その姿が「围绕すること紫金色を以てす。三十二相を具し、袈裟衣を被服し、白蓮華台に坐せり。」と説かれている。現図では、両手で説法印を結ぶ姿で描かれ、両脇に無能勝と無能勝妃、背後に虚空蔵と觀自在の二菩薩を従える。旧図様では、右手に施無畏印を結び、無能勝をはじめ七尊の眷属を伴う<sup>14)</sup>。なお、胎藏圖像では、釈迦牟尼を描いた部分が欠損しており、その姿を窺うことはできない。眷属の代表格である無能勝は、『蘇悉地経』以来の仏部の忿怒である。『大日経』の「具縁品」では言及されないが、胎藏曼荼羅の各院をそれぞれ独立させた別壇曼荼羅を説く「秘

図1 仏部諸尊



① 釈迦牟尼とその従者（胎藏旧図様）

三部三昧耶と三部諸尊



②能寂母 (仏眼)



③毫相明



④白傘仏頂



⑤勝仏頂



⑥最勝仏頂



⑦火光聚仏頂



⑧捨除仏頂



⑨廣大仏頂



⑩極大仏頂



⑪無辺音声仏頂

密漫荼羅品」では、釈迦壇に無能勝と無能勝妃が加えられている。<sup>(15)</sup>

### 能寂母（仏眼）

能寂母とは、いわゆる仏眼のことで、初期密教以来の仏部の部母である。チベット語訳『大日経』には、「これ釈迦牟尼の母なり。」と説明されている。胎藏圖像にのみ、左手に蓮華に載せた仏眼を持つ姿で描かれている。なお、現図の遍智院に描かれる定印を結ぶ仏眼は、『大日経』が説く虚空眼仏母に相当する。

### 毫相

毫相 (Ura) は、如来の白毫の光明を尊格化した女尊である。漢訳『大日経』には、「鉢頭摩華 (padma・蓮華) に坐し、円照にして商佉 (sakti・白い巻貝) の色なり。如意宝を執持して、衆の希願を満足す。」と説かれており、旧図様には欠落しているが、胎藏圖像、現図には、左手に蓮華に載せた宝珠を持つ姿で描かれている。

### 五仏頂と三仏頂

仏頂尊は、如来の肉髻から発せられる威光を像形化した尊格である。胎藏曼荼羅の釈迦院には、五仏頂と三仏頂の、二つの仏頂尊のグループが描かれる。『大日経』には、それらの尊容について詳述されていないが、胎藏曼荼羅の諸作例では、『二字仏頂輪王経』の所説に依拠して、五仏頂のうち、白傘仏頂が蓮華に載せた白傘、勝仏頂が蓮華に載せた剣とウトバラ華（睡蓮の花）、最勝仏頂が蓮華に載せた輪、火光聚仏頂が蓮華に載せた火聚、捨除仏頂が蓮華に載せた鉤、三仏頂のうち、廣大仏頂が蓮華に載せた金剛杵、極大仏頂が蓮華、無辺音声仏頂が蓮華に載せた法螺貝を持つ姿に描かれている。<sup>(16)</sup> 現図では、それらすべてが菩薩形で表現されるが、胎藏圖像、旧図様では、頭頂に肉髻を具えた姿で描かれる。

(二) 蓮華部の諸尊

觀世自在

蓮華部の主尊である觀世自在(觀自在、觀音)が、蓮華部のシンボルである蓮華を持物とすることはよく知られている。『大日經』の記述によれば、觀世自在は白蓮の座に坐し、その身色はクンダ華や巻貝や月光のように白く、頭に阿弥陀の化仏を戴いて微笑むとされる。

多羅

多羅(Tara)は、觀音が衆生を哀れんで流した涙から生じたともいわれる女尊で、チベット仏教では絶大な人気を誇っている。その身色は青で、手にウトパラ華(睡蓮の花)を持つことが特徴であるが、現図では、合掌する姿に描かれている。<sup>(17)</sup>

毘俱胝

「眉間の皺」という意味の名を持つ女尊である毘俱胝(Bhikṣu)は、インドではしばしば、多羅とともに觀音の脇侍として表現される(図C)<sup>(18)</sup>。四臂で、右の第一手に与願印を結び、他の三手に数珠、蓮華、水瓶を持つ。額に第三眼を有することが特徴であるが、現図では、それが省略されてしまっている。『大日經』の記述によれば、白い身色で、黄、赤、白の光明を放つとされる。



図C 多羅と毘俱胝を脇侍とする觀音像  
(ナーランダー考古博物館)

## 得大勢

観音とともに阿弥陀三尊を構成する、勢至菩薩に相当する尊格である。未敷蓮華（蕾の蓮華）を持つことが特徴で、『大日経』によれば、身色は商佉（sankha・白い巻貝）のようであるとされる。

## 持明称者

耶輸陀羅（Yasodhara）というサンスクリット尊名でも呼ばれる女尊で、『大日経』の記述によれば、インドに産するプリヤングという植物の花枝を持ち、身色は金色である。なお、旧図様では柳枝を、現図では植物の葉を持つ姿に描かれている。

## 白処

白処は、大明白身や白衣とも呼ばれる蓮華部の部母で、『蘇悉地経』では半拏囉縛悉寧（Pandaravasini）というサンスクリット尊名で登場した。白い衣服を纏い、開敷蓮華（開いた蓮華）の花を持つ。

## 何耶揭利婆（馬頭）

何耶揭利婆（Hayagriva）は、わが国で馬頭観音として知られる尊格である。インドでは観音の眷属の一尊であり、蓮華部の忿怒として認識されていた。現図では、馬頭印を結ぶ姿に表現されるが、胎蔵図像に描かれるように蓮華と斧を持つことが特徴である。旧図様と現図では、忿怒形で三面を有し、頭頂に馬頭を載せるが、胎蔵図像では面相そのものが馬頭になっている。『大日経』の記述によれば、その身色は、朝日のような赤色とされる。

図2 蓮華部諸尊



③毘俱胝



②多羅



①觀世自在



⑤持明称者



④得大勢



⑦何耶揭利婆 (馬頭)



⑥白処

## (三) 金剛部の諸尊

## 持金剛

持金剛 (Vajradhara) は金剛部の主尊で、金剛手 (Vajrapani) と呼ばれることもある。漢訳『大日経』では金剛蔵とも訳されており、護身法の金剛部三昧耶の観文に出る「金剛蔵」は、この尊格に相当する。<sup>19)</sup>『大日経』の説明によれば、左手に金剛杵を持ち、身色は、プリヤングの花や緑宝 (エメラルド) のような緑である。『金剛頂経』系の密教では、金剛薩埵 (Vajrasattva) と呼ばれるようになり、『理趣経』系の儀軌では、金剛杵とともに金剛鈴を持つ姿に展開する。

## 忙莽雞

忙莽雞 (Mamak) は『蘇悉地経』以来の金剛部の部母で、執金剛と同様に金剛杵を手にする。金剛部の重要な尊格であるにも関わらず、現図では欠落している。胎蔵図像では独尊で、旧図様では軍荼利と大力の二尊の忿怒尊を従えて描かれる。

## 金剛針

『大日経』の記述によれば、この女尊は微笑し、使者たちに囲まれるとされる。胎蔵図像、旧図様では、『不空罽索神变真言経』を参照して、左手に独鈷杵、右手に金剛針<sup>20)</sup>を持つ姿に描かれているが、現図にはこの尊格が描かれていない。

## 金剛商羯羅

尊名に含まれる「商羯羅 (srikhala)」は、鎖を意味するサンスクリットである。その名のごとく鎖を持物とする女尊で、『大日経』によれば、身色は黄緑である。

## 月麿

月麿は障礙を摧壞する忿怒尊で、漢訳『大日経』では、「三目にして四牙を現し、夏時の雨雲の色にして、阿叱叱(at-ta)の笑声あり。」と説明されている。さらに、「百千の手に、衆の器械（武器）を操持す。」と説かれるが、胎藏圖像では三叉戟と独鈷杵を持つ二臂像、現図では、さらに胸前で交叉する二手を加えた四臂像に描かれている。旧図様では、この尊が欠落している。

## 金剛部眷属

胎藏圖像では、執金剛の従者として、軍荼利、怒身金剛、赤身金剛、大力金剛の四尊の忿怒尊が描かれている。このうち軍荼利は、初期密教以来の、金剛部の忿怒である。旧図様では、このうち軍荼利と大力金剛が多羅女尊の従者として描かれており、現図では、赤身金剛と大力金剛が金剛部院の金剛部使者として小さく描かれている。

## 四 三部と三業・三密

『蘇悉地経』をはじめとする初期密教経典では、仏部、蓮華部、金剛部の三部の諸尊が、それぞれ息災、増益、調伏の三種法に結び付けて解釈されるが、護身法の三部三昧耶の観文では、身、語、意の三業に対応させられている。

密教史の上で、いつのころ三部と三業（あるいは三密）が関係付けられたのかは明確でないが、金剛界曼荼羅の尊格構成には、この関係性が色濃く反映されている。

金剛界曼荼羅は、如来部、金剛部、摩尼部、法部、羯磨部の五部の構造を有するが、このうち如来部、法部、金剛部は、それぞれ仏部、蓮華部、金剛部の三部に対応する。『金剛頂経』系の五部の組織は、三部の組織に摩

図3 金剛部諸尊



①持金剛



②忙莽鷄



③金剛針



④金剛商羯羅



⑤月摩



⑥金剛部眷屬 (軍荼利・怒身金剛・赤身金剛・大力金剛)

尼部と羯磨部を付加して成立しているである。

ここで、法部に属する西方輪の尊格構成に着目すると、阿弥陀如来を中心に、四親近として金剛法、金剛利、金剛因、金剛語の四菩薩が配されている。金剛法は、蓮華部の主尊である観音の密教名であるが、尊名にある「法(dharma)」は、釈尊によって言葉として説かれた法を指す。金剛利は、空智によって言語を超越することを内証とする文殊の密教名で、『理趣経』の第七段では「無戲論」とも呼ばれる。金剛因は、纒発心転法輪の密教名である。纒発心転法輪は、成道直後の釈尊が説法をためらった際、過去仏たちに代々継承されてきた輪宝を献じて初転法輪の起因を作った菩薩である。<sup>22)</sup> 金剛語は、文字通り言葉の菩薩で、『金剛頂経』では「無言」や「秘密語」とも呼ばれる。<sup>23)</sup> このように、蓮華部に対応する法部には、言語(語業・語密)に関連する菩薩が集められているのである。

次いで、金剛部に属する東方輪を見ると、阿閼如来を中心に、金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛喜の四菩薩が配されている。このうち金剛薩埵は、金剛部の主尊である執金剛が普賢菩薩と合楙することによって成立した尊格で、菩提心を司る。そして、他の三尊の菩薩は、衆生を悟りに導くプロセスを、恋愛時に起こる感情に喩えて生み出された菩薩たちである。鉤を持つ金剛王は、相手を自分の許に招く過程を象徴する。弓矢を持つ金剛愛は、互いに愛し合い染着する過程を表す菩薩であり、金剛喜は、恋愛が成就したその喜びを象徴する菩薩である。このように、金剛部には、感情(意業・意密)に関連する菩薩たちが集められているのである。

金剛界曼荼羅の主尊である毘盧遮那如来(大日如来)を中心に、四部の仏母たる四波羅蜜菩薩を配した如来部の中央輪を、直ちに身業・身密と結び付けることには難があるが、『金剛頂経』の発展の延長線上に成立した後期密教の聖典『秘密集会タントラ』では、毘盧遮那、阿弥陀、阿閼の三如来をそれぞれ、身、語、意の三業・三

密に対応させる思想が随所に見受けられる。<sup>(24)</sup>

このように、金剛界曼荼羅の如来部、法部、金剛部は、三業あるいは三密との関係性を有しているのである。三部三昧耶を説く儀軌は、その多くが『金剛頂経』を伝持した金剛智三蔵あるいは不空三蔵の訳であり、<sup>(25)</sup> 三部を三業に結び付ける思想は、金剛界系の密教から導入されたものではないだろうか。

付記 本稿は、智山伝法院における総合研究会（平成二十七年十月五日開催）での講義の内容の一部をまとめたものである。

## 註

- (1) 五種の印明からなる護身法の成立過程については、佐藤正伸「護身法について」『高野山大学論叢』二八（一九九三）に詳しい。
- (2) 平成二十二年（二〇一〇）に智積院より発行された次第（常盤寮蔵本）を参照。
- (3) 田中公明『仏教図像学』（春秋社、二〇一五）一六二頁―一六九頁を参照。
- (4) 「十八道念誦次第」成立の典拠の一つとなった不空三蔵訳『無量寿如来観行供養儀軌』では、仏部三昧耶の観文において「無量寿如来、三十二相八十種好了了分明なり。」（大正蔵一九卷・六八頁上段）とあり、無量寿如来が仏部の主尊として挙げられている。
- (5) 胎蔵曼荼羅の諸尊を描いたペンコルチャーデ仏塔の不空羅索堂の壁画でも、文殊、観音、金剛手の三尊は、他の尊格に比して大きく描かれている。田中公明「ペンコルチャーデ仏塔不空羅索堂の胎蔵曼荼羅諸尊壁画について」『密教図像』一七（一九九八）を参照。
- (6) 大正蔵一八卷・六〇三頁下段―六〇四頁中段。
- (7) 大正蔵一八卷・七六六頁上段。
- (8) 大正蔵一八卷・六二七頁下段―六二八頁上段。なお、それぞれの別壇曼荼羅の外院には、さらに諸天が描かれる。
- (9) その他、『陀羅尼集経』や『文殊師利根本儀軌経』などの初期密教経典にも三部組織に基づく曼荼羅が説かれるが、

- 著しい尊数の増加が見られるので、煩雑になることを恐れ、ここでは詳述しないことにする。それらの曼荼羅については、田中公明『インドにおける曼荼羅の成立と発展』（春秋社、二〇一〇）の第二章を参照されたい。
- (10) 善無畏三蔵の口伝を一行阿闍梨がまとめた『大日経疏』には、いわゆる「阿闍梨所伝の曼荼羅」と呼ばれる胎藏曼荼羅が説かれているが、その作例は遺されていない。
- (11) 胎藏図像、胎藏旧図様、現図の比較は、石田尚豊『曼荼羅の研究』（東京美術、一九七五）に詳しい。
- (12) 蓮華部院については大正蔵一八卷・六頁下段―七頁上段、金剛部院については同・七頁上段―中段、釈迦院については同・七頁中段―下段に説かれる。
- (13) 釈迦牟尼の図像については、胎藏図像では欠損しているため、胎藏旧図様より補った。また、白傘仏頂、勝仏頂、捨除仏頂の持物も判別が難しいので、旧図様を対照した。
- (14) 背後の二菩薩はそれぞれ蓮華と金剛杵を持ち、釈迦、観音、金剛手の三尊形式を構成する。
- (15) 大正蔵一八卷・三五頁上段。
- (16) これら五仏頂と三仏頂の持物は、三昧耶形による別壇曼荼羅を説く『大日経』の「秘密漫荼羅品」にも説かれている。大正蔵一八卷・三五頁上段。
- (17) 叡山本の胎藏曼荼羅（いわゆる山図）では、合掌した両手でウトパラ華を持つ多羅が描かれる（大正蔵図像部二卷・六六八頁）。多羅の尊容の系統については、田中公明『敦
- 煌・密教と美術』（法蔵館、二〇〇〇）四〇頁―四二頁に詳しい。
- (18) 多羅と毘俱胝は蓮華部の重要尊であり、胎藏図像と旧図様では、これら二女尊に限って二尊ずつの使者を伴って描かれる。
- (19) 金剛部三昧耶の観文にある金剛蔵を、現図の虚空蔵院に描かれる百八臂金剛蔵王菩薩に比定する意見もあるが、この菩薩は、千手観音に対比して新たに考案された尊格である。胎藏図像では棒状の武器、旧図様では独鈷杵の形に表現されている。
- (20) 大きな笑い声を表す擬声語。呵々大笑のこと。
- (21) 金剛因については、拙稿「密教における纒発心転法輪菩薩」『智山学報』六五（二〇一六）を参照されたい。
- (22) 大正蔵一八卷・二二二頁上段（不空三蔵訳『三卷本金剛頂経』）。
- (23) 例えば、第六分では、阿閼、毘盧遮那、無量寿（阿弥陀）の三金剛如来が、それぞれ意、身、語の真言を説き、第七分では、仏、金剛法（観音）、普賢（金剛薩埵）による身、語、意の憶念法が説かれる。松長有慶「秘密集會タントラ和訳」（法蔵館、二〇〇〇）二七頁および三八頁を参照。
- (24) 三部三昧耶を説く儀軌については、『智山伝法院選書一五・智山の真言』（二〇一〇）の巻末に付された一覧表を参照されたい。

※図Aおよび図Cは、筆者が撮影。図1-①は『大正新脩大藏經・  
図像部』より、他の図は、石田尚豊『曼荼羅の研究』（研究篇）  
よりの転載である。

〈キーワード〉

護身法 三部三昧耶 三密 胎藏曼荼羅